

## ツーリスト的転回： グローバル社会を読み解くツーリズム研究

高橋 雄一郎

### 序

ツーリズムが人文社会学の本格的な研究対象となったのは、1970年代である。当時、ツーリズムは「日常からの脱却」と位置づけられた。つまり、旅に出ることは、煩雑な日々の生業からの解放であり、ポスト工業化社会の仕事のストレスに疲弊し、社会生活に疎外感を覚える現代人が、失われた人間性を回復し、俗化され、汚染されていないオーセンティックな文化や自然に触れることで癒される行為、やや誇張した言い方をすれば、聖性を帯びた行為として解釈されたのである。こうした考え方が、現在、完全に有効性を失ってしまった訳ではないが、社会構築主義の立場を取れば、日常生活に対置された、深層的な「オーセンティシティ」を措定することは、本質主義的な陥穽と指摘されよう。所謂ポストモダンな現代には、「本物」などどこにも存在しない。本論は、ツーリストを本物という聖杯を求めて異郷を彷徨う旅人ではなく、むしろ、浮遊する記号や表象、シミュラクラに満ち溢れた空間を、あらゆる欲望の充足を求めて漂い歩く、消費社会に不可欠な構成員として捉えることで、ツーリズム研究の今後の課題を探る。

### I

ツーリズム研究を論じるにあたっては、ツーリズムという言葉の示す範囲に言及しておく必要がある。日本語では「観光」や「見物」を主眼とした旅行を指すことが多いが、筆者はより広い意味での人の移動、英語でいえば mobil-

ity や displacement の下位概念としてツーリズムを考えている。ヒト、モノ、資本、情報が短いタイムスパンで移動を繰り返し、国境が多孔的でより浸透性を持つようになったグローバリゼーションの時代にあって、認識のモードは、単一の民族や言語、あるいは文化的伝統を背景とした固定的なものから、複眼的、異種混淆的に流動を続ける、謂わば「ツーリスト的」なものに変質しつつある。

2003年に『ツーリズム入門』を上梓し、ツーリズム研究に新局面を拓いたエイドリアン・フランクリン (Adrian Franklin) は、以下のような表現で、私たちが、日常の多くの時間をツーリストと同じように、「ツーリストティック」と呼ばれるやり方で過ごしていると指摘する。

ツーリズムは、その重要性にもかかわらず、これまで研究対象とされなかった、グローバリゼーションの文化的プロセスの一つである。視点を反対から考えれば、グローバリゼーションの世界は、ツーリズムによって、ツーリズムの似姿に象って造形されてきた、ともいえる。世界がツーリストティックになった、あるいは、少なくとも、ツーリズムが私たちのほとんどが身を置いている消費主義社会のメタファーになったと主張する理由はここにある。(5)

筆者は、フランクリンを敷衍して、次のような主張をおこなう。現在、ツーリズムは私たちの日常に毛細血管のように入り込んでいる。ツーリズムは文化を構成する大きな要素となっているだけでなく、私たちの知覚、認識、思考の様態を、日々更新している。ツーリズムを抜きにして、私たちは社会の構成、あるいは社会の構成にもたらされた変化を読み取ることはできない。「言語論的転回」という思想史上の大きなパラダイム・シフトを体験した私たちは今、「ツーリスト的転回」ともいえる、新たなパラダイム・シフトのさなかにいる。

## II

単なる気晴らしや遊興であるゆえに「真面目な」研究対象にはならない、と思われてきたツーリズムが、人文社会学の研究分野としてアカデミアの一角を占めるようになったのは、ジャンボジェットが就航し、マス・ツーリズムの時代が本格化した1970年代以降のことである。これは、ディーン・マッキヤネ

ル (Dean MacCannell) の *The Tourist* (1976) とヴァレレン・スミス (Valene Smith) 編による *Hosts and Guests: the Anthropology of Tourism* (1977) [邦訳『観光・リゾート開発の人類学』(1991)] の2冊の書に負うところが大きい。しかし、その後のツーリズム研究にとって残念だったのは、マッキヤネルがツーリストの根源的欲求と考えた「オーセンティシティの探求」や、スミスの論文集の冒頭を飾ったネルソン・グレーバーン (Nelson Graburn) の論文の表題, “Tourism: The Sacred Journey” (邦訳「聖なる旅としてのツーリズム」) などが、ツーリズム研究の根幹をなす概念として、誇張され、あるいはやや曲解されて捉えられ、ツーリズムが日常と非日常の二項対立の中で、あたかも聖性を帯びたものであるかのように位置づけられた点である。つまり、旅に出ることを、単調あるいは煩雑な日々の生業からの解放であり、疲弊し、疎外感を覚えた仕事人間たちが、俗化され、汚染されていない文化や自然に触れることで癒される行為と解釈する見方である。

筆者は、ツーリズムに付与された、人を癒し、新たな活力を与えて、再び社会に復帰させるという役割が、現代の感覚に必ずしもマッチするものではないと考えている。ツーリストがオーセンティシティを希求する、という見方は、日常生活がオーセンティックではない、ニセモノで「俗」な時間や空間に属していて、どこか日常から離れた場所に、オーセンティックで「聖」なる時空が存在する、という仮説に立脚している<sup>1)</sup>。表層的な日常に対置して、深層的な「オーセンティシティ」を措定することは、は、本質主義的な誤謬といえる。マッキヤネルの主張が、オーセンティシティの価値を認めることではなく、オーセンティシティが有徴化され、演出され、表象されるプロセスを問題化する点にあったことは、押さえておかなければならない。

現代の感覚にマッチしないと行ったのは、私たちが暮らす所謂ポストモダンと呼ばれる世界が、聖と俗、真と偽、善と悪、美と醜、あるいは男と女といった対立項によって区分されるものではなく、常に曖昧で可変的な境界、複製技術により増殖されるイメージの「パステイッシュ (Jameson, 1985, 118)」によって特徴づけられるからである。『観光のまなざし』の翻訳出版以来、日本でも引用されることの多い社会学者のジョン・アーリ (John Urry) は、マッキヤネル的な意味での、オーセンティシティを求める旅の時代は終焉を迎え、現代は「ポスト・ツーリスト」出現の時代であるという主張を展開している(2002, 75)。アーリの言う「ポスト・ツーリスト」たちは、オーセンティシティを問題

にしない。彼女たち／彼らは、自分たちのまなざしの対象、あるいは自分たちの欲望を充足させてくれる装置が、あからさまなコピーであったとしても、それによって意気消沈することはない。世界が虚構の構築であることを知った上で、虚構の世界に楽しむ術を心得ている旅人たちだからである。

旧石器時代に描かれた躍動感溢れる動物たちの壁画を見るために、人々はスペインのアルタミラまで旅をする。しかし、本物の洞窟は壁画の環境保全のために封印されており、現地で目にすることができるのは、巧妙に再現されたレプリカに過ぎない。しかし、ポスト・ツーリストたちにとって、レプリカとの遭遇は、彼ら／彼女たちの旅の喜びを減ずるものではない。ポスト・ツーリストたちは、レプリカを見て、レプリカのさらにレプリカであるみやげ物を購入し、旅への欲望を充足させて、帰宅の途につく。

社会学者の須藤廣が紹介する次のエピソードは、ポスト・ツーリストたちにとっては、苦勞して(つまり、時差ボケの眠い眼をこすりながら、口に合わない食事を胃に流し込み、ショッピングをしようにも上手く言葉が通じないなどの障害を乗り越えて)遠隔の地に旅をし、本物の場所に足跡を印すことをしなくても、旅行体験が成立することを示唆している。

筆者の住んでいる九州地方を中心に流されているコマーシャルフィルムに次のようなものがある。オランダの街並みが映し出される。ヨーロッパ旅行中の太目の中年日本女性が、「うわーハウステンボスみたい」と楽しそうに叫ぶ。彼女は運河で、チューリップ畑で、みやげ物屋で写真のシャッター音をバックに「ハウステンボスみたい」と繰り返す。最後に「ハウステンボスみたいね、ヨーロッパって」「ハウステンボスに行きたくなくなっちゃった」という言葉とともに女性の顔がアップになり CF を締めくくる。長崎県佐世保市郊外にあるテーマパーク、ハウステンボスと提携するカード会社の CF である。表現されているのは、オリジナルの権威ではなく、オリジナルとそのコピーが逆転している姿である。(174)

こうした虚構の構築物として、代表的な例がディズニーランドであることは言うまでもない。しかし現在では、ディズニーランドのように、テーマパークとして日常社会から隔絶され、囲われた空間の内部に「ファンタジー」の世界が構築されるだけでなく、日常世界そのものが、(伝統的な認識による)「現実」とは乖離した、記号、イメージ、表象で充満している。私たちは遠くの土地へ

旅に出ることをしなくても、日常生活の中で、ポスト・ツーリスト的な経験に呑み込まれていると言ってもよい。記号学者のウンベルト・エーコ (Umberto Eco) がハイパー・リアリティの中の「旅」と表現しているものがそれである。

### III

ツーリズムを「聖なる旅」として捉える、前述したグレーバーンの考え方は、文化人類学による通過儀礼の研究をモデルとし、アーノルト・ファン・ヘネップ (Arnold Van Gennep) により提唱され、ヴィクター・ターナー (Victor Turner) により広く応用されたりミナリティ (過渡性) の概念を援用している。リミナリティは敷居を表す、ラテン語のリーメンから作られた造語であり、通過儀礼が、比喩的には、敷居をまたぐことによって人生のより高次の段階へ移行し、共同体への加入を認可する儀礼であることを示している。ツーリズムとの関係で看過できないのは、儀礼が執行される聖なる時間と空間において、日常の価値体系が一時的に置換され、秩序の逆転や権威の停止といった「遊び」感覚の構築が容易になる、という点であろう。ツーリズムも、誕生から死へと直線的に進行する人生の道程のいくつかの節目において、仕事や社会生活の負担からの解放感を味わうことのできるリミナルなイベントとして捉え得る。例えば毎年決まった時期に夏休みを取るとか、適当な時間的間隔をあけて、自文化とは異なる価値体系を持つ異文化に触れることで、生のリニューアルがなされる、という考え方である。

一方、休暇を取って旅をするという行為がより頻繁におこなわれ、普段の生活に溶け込んでいくと、通過儀礼にみられるような、人生の過渡性といった特別な意味は希薄化し、ツーリズムは日常の一部として知覚されるようになる。この変化をうまく捉えているのが、ヴィクター・ターナーの使ったリミノイド (リミナルではないが、リミナルに類似したという意味) の概念である。ターナーによれば、ポスト工業化以前の社会では、価値体系が一時的に停止した、過渡的で遊戯的な、リミナルな時間や空間は、世俗的、宗教的な権威によりコントロールされていて、個人が勝手気ままに作り出すことはできない。例を挙げようとするれば枚挙に暇がないが、共同体に大人の成員として認められ、祝宴をもって迎えられるためには、子供がそれ以前に、一定期間の隔離や試練に耐えなければならない、という社会は多い。逆に、カーニヴァルの祝祭空間は灰

の水曜日と四旬節の訪れにより終止符が打たれる。一週間の労働の後に安息日があり、楽しかった夏の休暇も、終わってしまえば、また一年待たなければならぬ。

しかし、ポスト工業化以降の、リミノイドな特徴を持つ社会では、支配権力によるこうしたコントロールは、急速に崩壊しつつある。私たちは週末を待たずとも、週日の夜にも華やかなレストランで会食をすることが可能だし、プロ・スポーツの観戦にも出かけていける。フレックス・タイムの採用が増加すれば、遊びやリラクゼーションの時間は、より自由に作り出すことができるだろう。IT化が浸透する近未来、人はもはや毎日決まった時間にオフィスに出勤する必要がなく、自宅にいても、また旅先でも、仕事と余暇をモザイク状に組み合わせる生活できるようになるはずである。まさに、日常の中に毛細血管のようにツーリズムが入り込んでいるような状態である。

ティム・エデンソー (Tim Edensor) は、Performing tourism, staging tourism: (Re) producing tourist space and practice 「ツーリズムをパフォーマンスする、ツーリズムを演出する—(再)制作されるツーリストの空間と実践」と題された論文で、「ツーリズムと日常の鱗状／瓦状の重なり合い」(59)という概念を提出している<sup>2)</sup>。彼の主張は、メディアの媒介によりスペクタクル化された今日の社会では、ツーリズムはデスティネーションとしての独立した空間を保有せず、ツーリストはその場に暮らす住民や、労働者、あるいは、たまたま通りがかった通行人の中を行き交いつつ、流動的なアイデンティティをパフォーマンスする、というものである。ツーリストはしたがって、「増大する文化資源を使って、ますますクレオール化する実践を生み出す」(72)、「幾重にも分裂症的(マルチフレニック)な」存在 (Gergen, 79-80)になる<sup>3)</sup>。

#### IV

「ツーリズムと日常の鱗状／瓦状の重なり合い」というエデンソーの概念を突きつめると、ツーリズムはもはや旅行者(ヒト)の移動を必ずしも必要としない、という結論に達する。確かに、ネット・サーフィンや、膨大な数のCS放送のチャンネルを数秒ごとに切り替え、あるいは何台ものモニターを同時に視野に収めることによって地球の隅々からの情報がリアルタイムで収集可能となり、さらに、人間の欲望が、そうした情報の実証的信憑性とは乖離した、記号やイ

メージの消費に変貌した現在、電腦空間で「ヴァーチャル・ツーリズム」を楽しむ方が、エコノミークラス症候群の危険を冒してまで長距離旅行をしてオーセンティックな文化に触れるより、ずっと刺激的だともいえる。アーリが皮肉にも「ツーリズムの終焉」(Urry 1995, 147)と呼ぶ状況である。

しかし、ツーリズムは本当に終焉を迎えるのだろうか。そうではなからう。こうした状況が生まれるのは、アルジュン・アパデュライ (Arjun Appadurai) が、エスノスケープ、メディアスケープ、テクノスケープ、ファイナンスケープ、イデオスケープと名付ける五つの次元における「グローバルな文化フロー」(69)において、国家を超えた資本やイメージの移動が、ヒトの移動と並んで、あるいはヒトの移動を凌駕する勢いで、進んでいるからである。ヒトの移動と共に、モノも、思考の形態も移動し、モノや思考の形態を基盤に形成される文化もまた移動する。

さらに、ヒトの移動が一点から出発し、いくつかのデスティネーションを回遊した後に再び出発点に戻る、「ツアー」という形式、つまり、安定した生活基盤を出発地とし、同じく安定した生活基盤に帰還する形態では括れなくなってきた点も見逃せない。世界の複数の場所に、仕事や家庭、あるいはレジャーの拠点を置き、ロケーションを変えながら生活を営むスタイルが増加している。こうした複数の場所における文化の出会いや混淆は、「ウチ (home)」と「ソト (away)」の区別がもはや明瞭ではないことを示しており (Urry 2002, 159), 「場所」という概念の変質を迫る。アーリは、『社会を越える社会学—移動・環境・シチズンシップ』の日本語版に寄せた序文で次のように述べている。

(中略)「場所」という単一の範疇は、すでに確立しているというよりはむしろ、主催者、ゲスト、建物、モノ、機械が特定の時刻に特定の場所で何らかのパフォーマンスをおこなうために、たまたま寄り集まるとような複雑なネットワークのなかで、その意味が示されることになる。(中略)それゆえ、場所はダイナミックなもの—「動きの場」であり、ひんばんに移動し、必ずしも一箇所に停泊しない船のようなものである。(xiii-xiv)

こうした移動の背景となっているのがグローバリゼーションであるが、本稿冒頭で述べたように、ツーリズムを“mobility”や“displacement”の下位概念として捉えようとした時に、多国籍企業、国際機関、国際 NGO などへの勤務はもとより、留学や国際結婚に端を発する海外移住、家族の呼び寄せ、親戚

や友人の訪問、老後を海外で暮らす人たち、そして労働市場の変化と経済格差により生じる膨大な数の移住労働者や、紛争や政治的抑圧を逃れて移動する難民の移動と切り離された問題としてツーリズムを論じることはできない。こうした人たちが置かれている状況は多様だが、ヒトの移動が文化の移動を引き起こしている点では共通している。ゆえに、国境を越えた移動、生活の変化に伴うアイデンティティの変化や、複数のシティズンシップを持つことの意味なども、広義のツーリズム研究の地平に浮上してくるのである。

## 跋

昔、タンドリと呼ばれる粘土の窯で焼いたインド料理は、インドまで旅しなければ賞味出来なかった。しかし、現在、インド人の作るタンドリ料理は、世界のちょっとした都会に行けばどこでも、(筆者が勤務する大学——それは東京郊外の準急も停まらない私鉄の小さな駅近くにある——の近所ですら)食することができる。無論、東京で食するタンドリ料理はインドで提供されるようなオーセンティックなものではない。(では、本当にオーセンティックなタンドリ料理は一体どこに存在するのだろうか。広大なインド亜大陸に広がるタンドリのヴァラエティの中からオーセンティックな料理を選び出すことなど、できる話ではない。当然のことながら、パリで食するタンドリ料理は、ニューヨークで食するタンドリ料理とは異なるし、もちろん、ムンバイのタンドリ料理とは違う。だからと言って、筆者が勤務する松原団地のタンドリ料理が二流だとか、ニセモノだとかいう議論にはならないと考えている。)

都市は、グローバルな文化的フローが交差する結節点である。たとえば六本木に行く。六本木ヒルズの最上階から眺める東京の夜景は、平凡な地上生活を異化してくれる。それだけではない。六本木では、五感に呼びかける強い刺激が無数に演出<sup>パフォーマンス</sup>されていて、遊歩者は眩暈に近い感覚に捕らえられる。森美術館に展示されている村上隆の作品や、ひしめく多国籍、無国籍レストランの数々。最近流行のニューハーフ・ショー(筆者には、妖艶な姿態をみせるダンサーたちが、男性なのか、女性なのか、同性愛者なのか、異性愛者なのか、性転換者なのか、異性装者なのか区別をつけることは困難だし、実際そのような区別が、意味を持つものかも分からない)。レゲエを売り物にするクラブの前で、日本語と英語を巧みに操り呼び込みをする黒人男性たち(筆者には、彼らの



母語が何語であり、彼らがどのような移動の経路を経て六本木に滞留しているのか、知る術がない)。

都市はツーリストティックな体験が持続的に生み出される空間である。あるいは、異種混濁的な、感覚的、身体的な呼びかけの連続により、これまた断片的で可変的な、ツーリストティックな主体が作られていく空間だと言い換えてもよい。今、世界を覆いつくそうとしているツーリストティックな感受性は、交通手段を利用して長距離を移動し、エキゾティックな体験をすることだけが「ツーリズム」であるという発想を塗り替えている。

#### 注

- 1) 「癒し」が、メトロポリタンな中心から離れた、エキゾティックな「周縁」に旅することで与えられるという発想は、(経済的な)支配者である「われわれ」が見失った「本物」を他者の領域に探しに行くという、欧米中心的、植民地主義的なものと言わざるを得ない。本論が描写する「ツーリスト的」な知覚や認識のモードは、反対に、西欧近代を支えてきた「大きな物語」を溶解させ、民族、言語、宗教、そしてなかならず国家の固有性、独自性に基盤をおいた「個の主体」を分解するものである。
- 2) 2001年に創刊された *tourist studies* の創刊号に所収された論文である。編者の Adrian Franklin と Mike Crang は、創刊の動機を、それまでのツーリズム研究における、業界の利潤追求及び政府の観光政策に貢献すること、そして、実証的なサイエンスであるという印象を作ること専念し、人文社会学的視座からのクリティックを欠いていた姿勢を批判することに求めた。Franklin と Crang は、その序文において、ツーリズムを消費財や消費の形式として捉えるのではなく、「新しいトランスナショナルな生を構成する重要なモーダリティ」として考えるべきだ(6-7)」と主張する。
- 3) エデンソーは、ツーリズムを「遠隔地への旅行」に限定されるものでなく、気分転換、休養、新奇なものとの出会い、運動、買物、飲食、セックスなどを含む、より広い余暇の利用法として捉えている。

#### 引用文献一覧

- アパデュライ・アルジュン, (2004) 「さまよえる近代——グローバル化の文化研究」 門田健一訳, 平凡社。
- Eco, U. (1986) *Travels in Hyper-Reality*. London: Picador.
- Edensor, T. (2001) 'Performing tourism, staging tourism: (Re)producing tourist space and practice', *tourist studies*, 1, 59-81.
- Franklin, A. (2003) *Tourism: An Introduction*. London: Sage.

- Gergen, K. ([1991] 2000) *The Saturated Self: Dilemmas of Identity in Contemporary Life*. New York: Basic Books.
- Graburn, N. (1977) "Tourism: The Sacred Journey" in V. Smith (ed.) *Hosts and Guests: the Anthropology of Tourism*. Philadelphia: University of Pennsylvania Press.
- Jameson, F. (1985) 'Postmodernism and consumer culture', in H. Foster (ed.) *Postmodern Culture*. London: Pluto.
- MacCannell, D. ([1776]1999) *The Tourist: A New Theory of the Leisure Class (With a New Foreword by Lucy A. Lippard and a New Epilogue by the Author)*. Berkeley: University of California Press.
- Smith, V. (ed.) ([1977]1989) *Hosts and Guests: the Anthropology of Tourism*. Philadelphia: University of Pennsylvania Press. 三村浩史監訳、『観光・リゾート開発の人類学——ホスト & ゲスト論でみる地域文化の対応』(1991) 勁草書房。
- 須藤廣 (2006) 『観光現象とポストモダニズム』安村克己, 遠藤英樹, 寺岡伸吾編, 『観光社会文化論講義』くんぶる。
- Urry, J. ([1990]2002) *The Tourist Gaze*. London: Sage. 加太宏邦訳, 『観光のまなざし——現代社会におけるレジャーと旅行』(1995) 法政大学出版局。
- Urry, J. (1995) *Consuming Places*. London: Routledge. 吉原直樹, 大澤善信監訳 『場所を消費する』(2003) 法政大学出版局。
- Urry, J. (2006) 『社会を越える社会学——移動・環境・シチズンシップ』吉原直樹監訳, 法政大学出版局。